2年ぶりの展覧会開催

ひと

鎌倉美術家協会理事長　峯尾（みねお）　直明（なおあき）さん

陶芸家。理事長を務める「鎌倉美術家協会」は鎌倉・湘南地域を拠点とする美術家、工芸家の団体。1964年に産声をあげ、創立会員には前田青邨、伊東深水、棟方志功ら名だたる巨匠が名を連ねている。鎌倉芸術館では7月5日まで協会主催の鎌倉美術展が開かれており「美術展を通して地域の美術文化の発展・普及に貢献したい」と話す。

鎌倉美術展は鎌倉で一番大きな公募展。絵画（日本画・洋画）、工芸（染織・陶芸）の作品が公募、会員・会友併せて300点以上展示されている。

昨年は芸術館が改修工事で中断したため2年ぶりの開催となった。「気持ちも新たに（開催を）迎えた」と言う。今回は本展とは別に、前回の受賞者が新作を発表する併設展も設けた。「協会がみんなを応援していることを示すためです」と語る。

子ども時代、工作大好き少年だった。木箱の木をかんなで削り、きれいにしてものを作っていた。それを見ていた父親が誕生日に大工道具セットを買ってくれた。

武蔵野美術大学に進み、宝飾会社に勤務などを経て、30歳で独立、ジュエリーデザインの会社「ミネオクラフト」を始めた。35歳のころ「仕事だけでは物足りない」と感じ、学生の時にやっていた陶芸をまた始めた。2013年には「動く」という作品で日本現代工芸美術展の「現代工芸賞」を受賞。現代工芸美術家協会の本会員でもあり、7月11日まで神奈川県民ホールで開かれている同美術展に出品している。

ジュエリーと陶芸のふたつの工芸の世界に関わっているが、「形を作ることでは一緒だ」と語る。「粘土は柔らかくて、ホッとする。心のバランスが取れる」と笑う。

毎週土曜日には横須賀市坂本の工房で陶芸教室を開いている。趣味の気分でつくった、取っ手が虹色の「レインボーカップ」は5月のデザイン・フェスタ（東京ビッグサイト）で完売するなど、人気商品になっている。

家族は妻と1男2女。ミネオクラフトの後継者は長女の彩（あや）さんに決まっている。「一見イジワルにみえるけど本当はやさしい」が、彩さんの父親評。横須賀生まれの横須賀育ち。61歳。（文・写真　三浦準司）

個人邸を活用　モダンな博物館誕生

鎌倉歴史文化交流館

建物も、庭園も、展示も必見です。

鎌倉駅西口から歩いて数分。閑静な住宅街の中に人造大理石で包まれた先進的デザインの建物が姿を現す。昨年5月15日に開館した「鎌倉歴史文化交流館」（青木豊館長）だ。1周年を迎えた同館について、学芸員の高橋真作さんにうかがった。

―このような好立地の場所にこのような素晴らしい建物が。

この建物はイギリスの著名な建築家ノーマン・フォスターが代表を務めるフォスター＋（アンド）パートナーズが設計を行いました。

世界各地で大規模建築や都市計画を手がけていますが、その中でも珍しい個人住宅です。日本国内では、フォスターによる住宅建築はこの建物しか残っていません。そのような貴重な建物です。21世紀の建築遺産として、この建物自体が文化資料として評価されていくだろうと思います。外観を眺め、館内散策することでフォスター建築の魅力を味わうのも当館の大きな見所でしょう。

先進的デザインに注目！交流館正面入口

―元々個人住宅だったということですが。

個人用住宅「Kamakura House」として2004年に竣工しました。大豪邸です。エントランススペースは天井が高くて広々としていますが、元々ガレージとして使われていました。

史跡永福寺跡出土瓦の展示

今展示室になっている部屋も同様で、観る人を驚かせるような豪勢な造りになっています。2013年に鎌倉市が寄贈を受け、元の意匠やデザインを損なわないように改修工事を行って、昨年開館しました。

―建物の背後にやぐらが見られたりと、歴史ある土地と思われますが。

背後を山に囲まれていますが、ここは古くから無量寺谷（むりょうじがやつ）と呼ばれてきた谷戸です。この辺りには鎌倉幕府御家人の安達氏が武家屋敷を構え、また安達氏ゆかりの無量寿院という寺があったといわれています。発掘調査で大きな礎石の跡が見つかり、鎌倉時代から使われていた土地であることが確認できます。

敷地からは池の遺構なども見つかっており、その周りには遣水（やりみず）と言う水路が延びていました。遣水の流路には今も岩肌から水が涌き出ています。また、建物の裏の崖に穿たれた一部の横穴は、鎌倉時代のやぐらです。

江戸時代に入ると、中世に活躍した刀工正宗の末裔である綱廣が住んでいたようです。エントランスに飾られている刀は、「正宗工芸」を営む山村綱廣さんからお借りしているものです。

大正時代には、三菱財閥4代目当主の岩崎小弥太がこのあたりに別荘を構えていました。

このように中世以来の景観と現代の建物風景が混ざり合って一つの空間を形作っているのも見所でしょう。

―館名に歴史・文化とうたい、その後に交流館と名付けていますが。

まずは鎌倉の歴史・文化を、市内の小中学生をはじめとする市民の皆さんが理解していく場所になっていくこと、それがこれからの鎌倉のまちづくりに繋がってゆくだろうということです。また、鎌倉を訪れる人にも見てもらえるような施設が求められていましたのでつくろうということでした。

常滑焼大甕　今小路西遺跡出土

さらに様々な市民交流が行えるような場にしていこうと、当初の計画にのっとって館名がつけられました。鎌倉の歴史と文化をしっかりと伝える使命を果たしつつ、市民交流の場として活用されるようにとの願いが込められています。

鎌倉を学び、交流できる場に

―展示のコンセプトは。

一つは「通史展示」です。鎌倉には、原始・古代から近現代に至る長い歴史がありますが、それを通覧できるような展示施設は今まで市内にありませんでした。鎌倉の小中学生や鎌倉を訪れる修学旅行生などに鎌倉の歴史を理解してもらえるようわかりやすい展示を心がけています。

もう1つが「考古展示」です。鎌倉では住宅の建て替えのときなどに発掘調査が行われ、多数の出土品が出ていますが、これまでなかなか一般の方の目に触れる場がありませんでした。当館の展示室では、なるべくそういった遺物を多数展示し、それを通じて鎌倉の歴史や当時の人々の生活を学んでもらおうと考えています。文献資料だけでは分からない歴史がたくさんあります。

政治的な重要事件は歴史の教科書に載っていますが、当時の人々がどのような暮らしをしていたか、どのような台所道具を使っていたかとか、どういう食器を使っていたのか、ということは、出土した考古資料でしかわかりません。補助資料として中世の絵画作品もありますが、現物そのものが鎌倉には多数埋まっているので、それを活かした形で鎌倉の歴史・文化を伝えていければと考えています。

―本館と別館、2棟ありますが、4つの展示室の特徴づけは。

1番目の部屋は「通史展示室」です。鎌倉ビギナーの方にも、導入として鎌倉の歴史全体を知ってもらおうということです。壁面には、鎌倉の歴史の中から10件の歴史的事件を選び「鎌倉十大歴史事件簿」のような形で展示しています。

そうした事件の紹介と、それを象徴するような資料を同時に展示し、またコンパクトな通史映像で、鎌倉の歴史の全体像をご覧いただきます。

（右）五輪塔　銭洗弁財天出土
（左）阿弥陀三尊種板碑　胡挑ヶ谷やぐら出土

2番目の部屋は「中世展示室」です。中世都市鎌倉の街の様子や、武士の営みなどを紹介しています。鎌倉武士がどういう姿だったか、武家屋敷にどんなものが置かれていたか。由比ガ浜では交易が行われていましたが、どんな品物がやり取りされていたか―他にも鎌倉を特徴づけるやぐらの紹介や、近隣にある銭洗弁財天の五輪塔＝写真右＝の展示も。

3番目の部屋は「近世・近現代展示室」です。2016年に鎌倉は「日本遺産」に認定されましたが、その中では近代の鎌倉に注目した内容になっています。近世以降も明治、大正、昭和と、時代の変遷を経て今の鎌倉の姿が形作られている、そんな鎌倉の歩みを紹介しています。

別館は「考古展示室」で、これまでご覧いただく機会のなかった出土品を展示しています。

当館では、このような出土品を主とした展示を通じて、鎌倉の都市構造や街並み、人々の生活や営みなどを跡付け、想像力を膨らませてもらうことを目指しています。

―市の管轄は。

鎌倉市教育委員会文化財部文化財施設課に属しています。出土品の管理は、文化財課が担当しているので、その担当者と連携をとりながら、展示などに積極的に活用しています。

―今後の方針は。

基本的に通史展示と考古展示を柱としながら、公の博物館でしかできないもの、他の館ではできないような鎌倉の歴史・文化を紹介する館として機能してゆければと思います。

焼き物の違い分かるかな？

―企画展「発掘！かまくら探偵団2018〜日本のやきもの編〜」（9月8日まで）とは。

渥美焼や瀬戸焼、常滑焼など日本各地で古くから焼き物が作られ、鎌倉市内からもたくさん出土しています。このような出土物はとっつきにくいので、小中学生を含め、考古学ビギナー向けの企画です。

瀬戸焼灰釉水注　若宮大路周辺遺跡群出土

どう鑑賞すればよいか、特徴とか、どこを見ればよいか、どのような地域からこのような品が鎌倉にもたらされたか、という考古遺物の入門展示です。今回は「日本のやきもの編」で、来年度以降もこの企画を展開していこうと考えています。

◎学芸員による展示解説　会期中の毎週土曜日午前11時から。申し込み不要。聴講無料。要観覧料。

―その後の展示予定は。

◎企画展「出土漆器の美」
9月15日〜12月15日
◎同時開催　明治150周年記念古写真展「激動の鎌倉〜武家政権の発祥と消滅〜」
が予定されています。

―どうもありがとうございました。

鎌倉歴史文化交流館
鎌倉市扇ガ谷1−5−1
☎0467・73・8501

心のふる里を行く ⑫

日本人の魂がやって来たところ

池田雅之

私はふる里の三重に帰ると、熊野灘の海辺を歩き、黒潮の渦巻く果てしない水平線を遠望することがある。その波路の果てに一体何があるのだろうと夢想する。私の母方の祖先たちも黒潮に乗って紀伊半島に漂着したにちがいないと思うことがある。そういえば祖父は日本人離れしたインド系の顔立ちをしていた。

今を遡ることおよそ百年前、1912年（大正元年）の8月、二人の中学生を連れ、志摩半島のはずれの岬・大王が碕の突端にしばし立ち尽くす若き教師がいた。弱冠26歳の折口信夫である。彼は我を忘れて真夏の陽を受けて光り輝く大海原を眺め渡していた。眼下に広がるのは波路のはるか果てまで光りに満ちた黒潮の通う熊野灘である。その美しさに打たれた折口は大海原の果てに何ものかを幻視したのである。

後にその体験を次のように記している。「熊野に旅して、光充つ真昼の海に突き出した大王が碕の尽端に立った時、遥かな波路の果てに、我が魂のふるさとがあるような気がしてならなかった。」

「写真で辿る折口信夫の古代」（角川ソフィア文庫）

（「妣（はは）が国へ・常世へ」）

若き日の折口が「光充つ真昼の海」の彼方に幻視したものは、太古の日本人が渡海してきた魂の原郷に他ならなかった。

「母の国」とは私たちの祖先たちが恋い慕う、今は亡き母のふるさとであり、「常世の国」とははるか遠い「不老・不死の国」を指していた。光充つ海の彼方に日本人の原郷ともいうべき二つの国の存在を幻視し、直観したのである。

折口は、熊野有馬村の「花の窟」を訪れた時も、同じような直観的な感動に打たれた。この巨大な岩壁に遭遇した時、イザナミの墓でもある窟に「母の国」の母なる存在を感じたのである。海の彼方に「母が国」や「常世の国」があり、神がそこからマレビトとして熊野の海を渡って来る。そしてその神々が我が国の礎を作っていった…。この折口の幻視の直観力が生み出す物語を単なる空想として退けることは難しい。日本人の祖先も、また私たちの魂のふるさとも海の彼方からやってきたに違いないからだ。

その意味で『古事記』の天孫降臨神話や神武天皇東征神話は、折口の直観力の正しさを裏付ける物語といえるだろう。折口信夫の古代学に導かれて、私たちは古の日本人の魂の誕生の瞬間に立ち会うことができるのだ。

（早稲田大学名誉教授・鎌倉てらこや顧問）

健康百科通信 ⑽⑼

朝ごはんしっかり食べていますか

管理栄養士　日本糖尿病療養指導士　武富　梨紗

皆さん、日頃から朝ごはんをしっかり食べていますか。

厚生労働省による国民健康・栄養調査において、働く世代を中心にしっかり朝ごはんを食べない人が多く、また文部科学省の調査では、朝ごはんを毎日食べない子どもの割合が、緩やかに増加していることが報告されています。

これは「ごはんより寝ていたい」「ダイエット中だから」「夕飯が遅いからお腹が空かない」などのさまざまな理由があると思います。しかし、朝ごはんを食べることは、①脳へのエネルギー補給、②体内時計のリズム調整、③肥満や糖尿病などの生活習慣病の予防など、私たちのからだが喜ぶ大切な役割があります。

子どもから大人まで、皆さんのからだに大切な朝ごはん。明日からしっかり食べられるよう、生活習慣を見直してみませんか。

湘南おおふなクリニック
鎌倉市大船2−25−2
☎0467・44・1117

NPO法人　ミャンマー　ファミリー　クリニックと菜園の会　MFCG （24）

命を育み夢を繋ぐ活動報告

当会代表理事　名知仁子

ミャンマー　ファミリー・クリニックと菜園（MFCG）は、ミャンマーの無医村に医療・菜園を通じ、保健衛生・栄養などを学ぶ機会を提供します。そして住民自身が生活環境の課題を解決し命を育む未来を描ける社会の実現をサポートすることを使命とした活動に専念しています。普段はミャンマーのデルタ地域・ミャウンミャで村の巡回診療と手洗いなどの保健衛生啓蒙活動、そして家庭菜園レベルの有機栽培で野菜作りなどを行い、命を育み、夢を繋いでいます。

今回はミャンマーと日本の活動について話します。

現地ミャウンミャで、先日ミャウンミャ橋が落ち、死者がでました。橋がないため、商業都市であるヤンゴンとの交通は、船で渡りながら巡回診療に廻っています。

中央がチョーカインさん
右が名知仁子さん

Health Assistant（HA）のU KyawKhing（チョーカイン）さんが7月16日から当会の活動に参加してくれることになりました。これで念願だった現地の村々でコミュニティヘルスプロローター（CHP）の育成が可能になります。CHPは、手洗いなど保健衛生の知識を持った村の一般人。その育成を行うことにより住民が健康に関して問題意識を持ち、病気の予防策を自分たちで立てられるようになってもらえればと考えています。

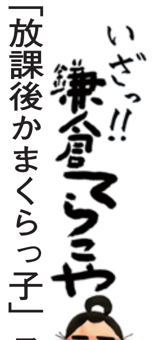
例えば、2015年に日本でも発生したデング熱は、活動地では雨季になると普通に発生し、子どもは亡くなることさえあります。CHPが病気の予防方法などを学び、それを住民に伝え、自分たちで健康を守れるようになってもらおうと思います。

移動クリニックをしている村の数は16ですが、雨季は道路の事情が悪く2つの村へ入れません。既にCHPの育成が終了したカンコーズ村を除き13の村で開催予定です。彼にはメンバー一同、チームメイトとして期待しています。

日本では7月8日午後1時半、埼玉県の国立女性教育会館で「第5回成恵会チャリティー演奏会」を開きます。当会代表理事・医師の名知仁子が「変わりゆくミャンマー〜NFCGのこの1年の活動を通じて成果と今後」の題でお話しします。ぜひ、お越しください。詳細はHPで。

【連絡先】東京荒川区東尾久8−41−23　☎FAX03・6807・7499
E-mail:myanmarfcg.info@gmail.com
HP:http://mfcg.or.jp/
FB:https://www.facebook.com/mfcg.or.jp

【この記事は清興建設提供】



いざっ!! 鎌倉てらこや ⑷⑻

「放課後かまくらっ子」スタート！

鎌倉てらこや事務局長　小木曽　駿

「放課後かまくらっ子」が、鎌倉市立深沢小学校区で始まっている。（1面に記事）

これは、子どもの家（学童保育）と、学校の校庭・体育館等を主な活動場所として自由に遊ぶとともに、地域のボランティア等がプログラムを実施するアフタースクール（放課後子ども教室）が一体となって、放課後の時間を作り上げていく施策である。その初めてのプログラムとなる「てらこや運動会」が6月13日に深沢小校庭で実施された。百人を超える子どもの参加があり、4つのチームに分かれて競い合った。はじめ子どもたちは大学生のお兄さんお姉さんを前にぎこちなさもあったが、選手宣誓を行い、「4人5脚リレー」の練習を重ねるうちに、走るのと変わらないスピードで駆け抜けるチームやハイハイ作戦を実行するチームもあらわれ、子どもと学生の関係性は深まった。

てらこや運動会

最終種目のドッヂボールが終わる頃には、「めっちゃ楽しかった！」「次はいつ来るの？また絶対参加する」という子どもたちの声を聴くことができた。

様子を見ていてふと疑問が浮かんだ。「今の子どもたちはいつもどのように遊んでいるのだろう」と。

多くの公園には、「ボールを使ってはいけません」「木登りはいけません」とルールがある。ガキ大将を中心に集まって遊ぶ子どもたちの姿もあまり見かけなくなった。「学校や親同士で問題になるから、ガキ大将はいなくなった」という声も聞く。しかし、授業で学ぶように異年齢の子どもたちが群れて自由に遊ぶ時間からも思いやりやルールなど「他者との関わり方」を学んでいくのではないだろうか。

私たち大人は、子どもたちがのびのび遊ぶ場を奪ってきたのかもしれない。だからこそ、地域・学校・家庭等の大人たちが協力して子どもたちが自由に遊ぶことのできる場をつくっていく必要がある。それはとりもなおさず、「子どもたちをどう育てていくのか」を社会全体で見つめ直していくことに他ならない。「かまくらっ子」の試みがそのきっかけとなればと思っている。

鎌倉てらこや事務局
☎0467・84・9746
（平日13〜17時）
http://kamakura-terakoya.net/

津波バイオリンで支援コンサート

鎌倉市倫理法人会

鎌倉市倫理法人会主催の「第5回東日本被災児童支援チャリティーコンサート」が6月2日、鎌倉女子大学二階堂学舎で開催された＝写真。鎌倉マジシャンズクラブの山田征礼会長さんらの素晴らしいマジックで開会。白木大五郎実行委員長の「震災の記憶を風化させることのないように」という挨拶に続き、収益金をもとに支援活動をしている鎌倉てらこやの活動報告があった。

コンサートで使用する「津波バイオリン」のDVDが上映され、今回特別に津波バイオリン製作者の中澤宗幸さんが実際の木材を使い解説した。

鎌倉在住のバイオリニスト松宮麻希子さん、宇治田かおるさんとジャズピアニスト杉山泰さんの「デュオうさくま」のベートーベン「ロマンスへ長調」の演奏に始まり、「花は咲く」の合唱で会場が一つになり感動に包まれて終了。贈呈式で支援金が鎌倉てらこやへ託された。来場、ご寄付、後援、協賛を賜った皆様に深く感謝申し上げます。

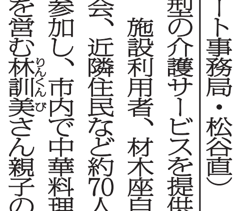
（鎌倉市倫理法人会コンサート事務局・松谷直）

介護施設の庭で餃子パーティー

材木座あじさいの家

鎌倉市材木座の小規模多機能型居宅介護事務所「材木座あじさいの家」の庭園で5月24日、ビアガーデンが開かれ、手作りの餃子が振る舞われた＝写真。

同施設は、市民の篤志家から約4百坪の土地と和風邸宅の寄贈を受けて社会福祉法人「鎌倉静養館」（西崎猛之理事長）が地域密着型の介護サービスを提供。



施設利用者、材木座自治会、近隣住民など約70人が参加し、市内で中華料理店を営む林訓美（りんくんび）さん親子の指導で餃子づくり。会食をしながら、ジャズバンドの演奏を楽しんだ。

終の棲み家を考える ㊿① 地鎮祭について

家を建築する時には幾つかの祭りの儀式があります。工事着工の前に地鎮祭を行い、骨組みを組み始める時に上棟祭、家が完成した暁に竣工祭を執り行うのが一般的です。最近ハウスメーカー等は省略する事も珍しくなりましたが、在来工法で建築する場合は殆ど行われているようです。

地鎮祭とは正式には『とこしずめのまつり』と訓み、建物の新築、各種土木工事の起工に際して、その敷地の守護神を祀って神こころを和め、土地が平安堅固であるよう祈ると同時に施主を始め、工事に携わる人々の無事安全を祈願するお祭りです。その歴史は古く西暦690年にはこの祭りの記録があります。他の国、他の宗教においても大地への畏敬の念から、人工的に手を加え、その上に住居を建てる場合、その土地の神の加護を祈ってきました。

専門業者に依頼する事もできますが、施工業者が手配する方が費用的にも安価にすみます。神職に祭祀料は3万〜5万円位、御供えする神饌は米・塩・水・神酒・海の幸・山の幸等1万〜2万円位、あとは施工業者に竹・砂・縄・テント等で数万円の御礼で良いと思います。迷信に惑わされず、時流に流されず、心豊かになる為にも、地鎮祭は大切な人生の祭りの一つです。

■**日向建設**　鎌倉市大船1−15−3
☎0467・47・5454
http://www.hyuuga.co.jp

朝日新聞の購読料は
口座振替で
・手数料は一切不要
・手続き簡単
ASA
従業員募集
詳しくは最寄りの
ASAへお問合せを
・専業従業員
・婦人パート
・学生アルバイト

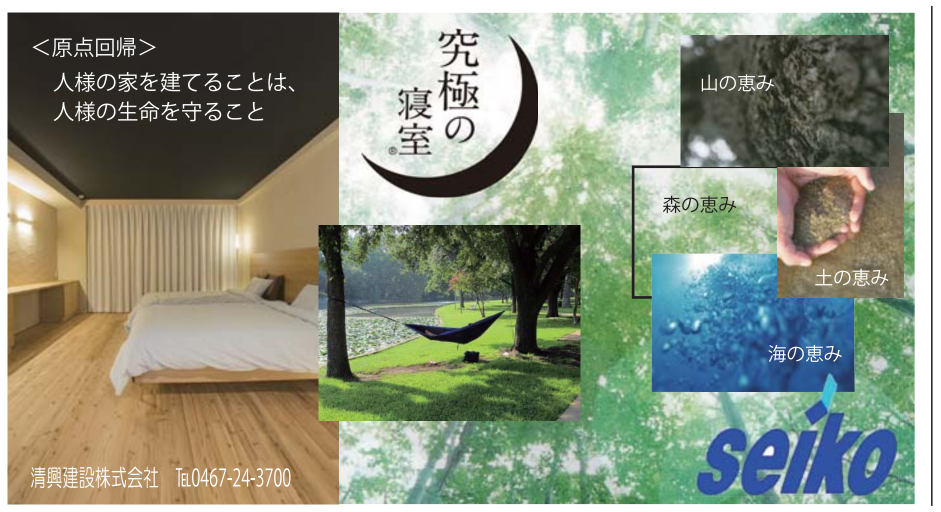
新刊『鎌倉日記Ⅱ』

岩渕祐一　著

鎌倉在住の美術家で随筆家の岩渕祐一氏による2冊目のエッセイ集。

著者主宰のウェブサイトから選ばれた15編に柔らかなタッチの自作絵画を挿絵として織り込みながら、何気ない日常の中にある「美しきものたち」に向けるあたたかな眼差しが伝わる一冊。

幼き日の昭和30年代に葛原ヶ岡でただ一度きり出逢った「キツネの家」や、寿福寺の踏切に現れる少女のまぼろしなど、当時の鎌倉の空気感を漂わせる不思議なエピソードや、自身も健康法として取り入れている気功法の観点から論じる絵画の「気」の受け止め方、老母が入院する病院の本棚に見つけた看護師の伊笠美代子氏の優れた詩作の紹介など、無名の弱者が日常から生み出すつつましやかな芸術の力強さは、時空を超えた文化論へとつながる。母の看病をしながら挑んだ自費出版への奮闘の顛末も。

1300円（税別）、岩渕祐一鎌倉日記制作委員会刊☎0467・24・1596